



ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND 2

彩昂祭の昼と夜
— 第一章 —



ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND 2

彩昂祭の昼と夜
— 第一章 —

ストライク・ザ・ブラッド

S T R I K E T H E B L O O D

A P P E N D 2

彩昂祭の昼と夜

— 第一章 —

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

波瀾院フェスタの余韻も冷めやらぬ十一月の半ば——彩海学園の生徒たちは全校あげて、もうひとつの祭典の準備に追われていた。

彩昂祭。いわゆる学園祭である。

特に規模が大きいわけでも、予算が潤沢なわけでもないが、彩海学園の学園祭は毎年異常に盛り上がることで知られている。娯楽の乏しい人工島で暮らす生徒たちにとって、学園祭は数少ない非日常の光景。積もり積もった日頃の鬱憤を晴らす、絶好の機会だからなのだろう。

正規の開催期間は二日間。しかし事前の準備や後片付けで授業のほとんどが休みになるため、実質的には一週間近くが学園祭期間ということになる。

そして迎えた彩昂祭前日。彩海学園の校舎は華やかな飾りつけを終えて、敷地内のあちこちで前夜祭のイベントが始まっていた。

しかし一方では準備が遅れて、最後の追いこみに駆り出されている生徒も少なくない。

高等部一年B組の彩昂祭実行委員、藍羽浅葱もその一人だった。

「どう、浅葱？ 使えそう？」

クラスメイトの築島倫が、そんな浅葱の耳元で訊いてくる。

浅葱たちがいるのは、彩海学園の情報処理教室。狭苦しいサーバールームには、見慣れない大型PCラックが運びこまれている。どう見ても高校の授業で使うレベルのパソコンではない。特殊な目的で設計されたとおぼしき、怪しげな雰囲気の実験機だ。

専用のヘッドマウントディスプレイを頭に被ったまま、浅葱は呆れたように首を振り、

「そんなわけないでしょ。なによこれ、無茶苦茶じゃないの。こんなOSでこれだけの筐体を動かそうなんて——」

「贅言言うなって。廃棄予定だった試作機をタダ同然で借りてきてやったんだから」

他人事のようなのんびりした口調で、苛立つ浅葱を矢瀬基樹がなだめる。

彩昂祭における一年B組の出し物はVRMMO——すなわち仮想現実大規模多人数お化け屋敷だった。

最先端のバーチャルリアリティシステムと、「魔族特区」で開発された幻術の融合によって、かつてないリアルな恐怖体験を生み出す体験型ホーンテッドハウス。その中核を担うシステムこそが、浅葱が調整中の幻術サーバーだ。とある企業で研究されていたこの実験機を、矢瀬が実家のコネを使って、無理やり借り出したのである。

「ったく、お倫の頼みとはいえ、なんであたしがこんなところでタダ働きを……」

不満げに頬を膨らませながらも、浅葱は滑らかな手つきでキーボードを叩き、筐体のデータを書き換えていく。

イベント用のアミューズメント装置とはいえ、幻術サーバーは高度な魔導科学製品だ。本来なら一介の高校生に使いこなせる代物ではない。それどころかこの筐体は、開発企業の技術者たちですら実用化を断念した未完成品なのである。

にもかかわらず、浅葱は即興で組んだプログラムで、あっさり筐体を起動させてみせた。

いかにも今ドキの女子高生という見た目からは想像もつかないが、浅葱の正体は世界中のハッカーに畏怖される天才プログラマーだ。『電子の女帝』という異名は伊達ではない。

「これじゃ最初からカーネルを作り直したほうが早いわね。モグワイ、ちょっと手を貸して」

その浅葱が、ヘッドマウントディスプレイの画面を切り替えて、表示された人工知能のAvatarに呼びかけた。浅葱がモグワイと名付けた人工知能の化身は、絃神島の都市機能を掌握している五基のスーパーコンピューターである。不細工な縫いぐるみ風のアイコンが、妙に人間臭い態度でケケツと笑い、

『やれやれ、仕方ねーな……って、なんだこりゃ、体感型ゲーム機ってやつか？ このご時世にバーチャルリアリティを使ったお化け屋敷なんて、子どもだましが過ぎるんじゃないか？』

「文化祭の出し物なんだから、これくらいでちょうどいいのよ……はい、これで再起動、と」

皮肉っぽい人工知能の言葉を適当に聞き流しながら、浅葱は筐体の電源を入れ直す。

次の瞬間、雑然としていたサーバールームの風景が、古めかしい洋館の廊下に変化した。モグワイの縫いぐるみ風のアイコンも、立体映像になって空中に浮かび上がる。VRMMO用の幻術サーバーが、浅葱たちの脳内に直接、幻を投影しているのだ。

「さすがね、浅葱。うん、ちゃんと動いてる」

触れることのできない立体映像の壁に手を伸ばして、倫が満足そうに微笑んだ。

矢瀬もホッとしたように息を吐き、

「これで明日の彩昂祭にはなんとか間に合いそうだな。お疲れさん」

「はいはい、どういたしまして。モグワイ、あんたも面白いわよ。地形とお化けのモデリングデータはこっちでインストールしとくから」

幻術サーバーの稼働状況を確認しながら、浅葱が投げやりに言い放つ。

しかしモグワイからの返事はなかった。

普段ウザいくらいに話しかけてくる人工知能が、めずらしく沈黙を続けている。そのことを訝しく思いながら、浅葱はもう一度彼に呼びかけた。

「……モグワイ？」

それでも人工知能はなにも答えない。虚空に映し出された彼の立体映像が、ノイズ混じりに小刻みに揺れる。縫いぐるみ風の質感を持つAvatarの表面に、いつの間にか黒い霧のようなものがまとわりついていた。

『ギギッ……!』

困惑する浅葱の視界の中で、人工知能のAvatarが不気味に囁く。

幻覚で描き出された景色の中で、黒く染まったモグワイの瞳が、無言で浅葱を見つめている。

2

「曉くん、この看板押さえて！ ダメ、まだちょっと曲がつてる！」

「古城！ その角材取ってくれ、角材！」

「ねえ、ちょっと曉！ 暗幕が全然足りてないんだけど！」

クラス企画の準備も大詰めを迎えて、高等部一年B組の教室はさながら戦場と化していた。

仮想お化け屋敷といえども、教室の出入口や受付はそれらしく飾りつけをする必要がある。来場者の転倒や激突を防止する安全対策も必要だ。案内係の衣装合わせや、宣伝用のチラシ作りなど、幻術サーバーの準備が終わっていないくても、やるべき仕事は山積みなのだ。それらの雑用のほとんどをなぜか押しつけられた古城が、さすがにたまりかねて悲鳴を上げる。

「だーっ！ おまえら、なんで全部俺に言うんだよ！ 彩昂祭の実行委員は浅葱だろ！」

「仕方ないじゃない、その藍羽がいないんだから」

悪びれない口調で言い返してきたのは、クラスメイトの

「人手不足なんだから仕方ないでしょ。なんとかして」

「なんとかってなんだ!？」

「そのくらい自分で考えてよね。部活の手伝いに行ってる連中を捕まえるとか、那月ちゃんに泣きつくとか」

「お、おう……」

古城は疲れたような表情で嘆息した。

夕歩の指示はさすがに無奈だと思いが、人手不足というのも事実だった。彩昂祭の本番までに残された時間は半日足らず。このままでは、教室の飾りつけが間に合うかどうか微妙なところだ。教室に残っているクラスメイトたちは全員が不眠不休で働いており、買い出しに使える余分な労働力はない。「ああ、くそ……しゃあねえ。とりあえず誰かクラスのやつを捕まえるしかねえか……」

やりかけの雑用を手早く済ませ、古城は気怠げな足取りで教室を出た。

彩昂祭ではクラス企画だけでなく、部活動や有志による出し物も多い。古城たちのクラスメイトの半分ほどは、その関係で校内のあちこちに出払っていた。彼らを見つけて買い出しを手伝わせようと、古城はあてもなく校舎の外へと向かう。ポケットに突っこんであつた古城の携帯が鳴り出したのは、その直後のことだった。

「……誰だ、こんなときに」

疲れていた古城は、相手の名前を確認することもなく電話に出た。聞こえてきたのは、興奮した少女の甲高い怒声だ。

『ちょっと、どうなってるのよ、曉古城!』

柵原夕歩だった。男勝りで気の強い彼女は、握っていた金槌の先端を古城に突きつけて、

「曉は部活もやってないんだし、生徒会活動とも無関係だし、どうせ暇人だし、藍羽の相手なんだから、そのくらいは手伝いなさいよね！」

「勝手に他人を暇人と決めつけるなよ！ てか相手ってなんだ!？」

「それに藍羽が帰ってくるまでの雑用は、あんたにやらせとけって矢瀬くんが言ってたし」

「あの野郎……よくも勝手なことを……」

思いがけない親友の裏切りに、古城は苛々と齒軋りする。夕歩は暗幕の固定作業を続けつつ、そんな古城を冷ややかに見上げて、

「文句ばかり言わないの。どうせ誰かがやらなきゃいけないんだから。というわけで、はい、これ。よろしくね、曉」

「なんだこれ?」

夕歩に押しつけられたメモを広げて、古城は眉間にしわを刻んだ。

「買い出しのリスト。模造紙とかテープとか画材とかペンア板とか」

「ちょっと待て。これ全部、俺が一人で買ってくるのか?」

メモ用紙数枚をぎつしり埋め尽くすリストを眺めて、無理だろう、と古城は顔を引き攣らせる。リストアップされた資材をすべて買い集めたら、余裕で軽トラック一台分くらいにはなりそうだ。どう考えても一人で運べる量ではない。

「煌坂か……いきなりなにを怒ってんだ、おまえは?」

挨拶もなしに怒鳴りつけてきた煌坂紗矢華に、古城がうんざりと訊き返す。彼女が、特に用もなく古城に電話してくるのはいつものことだが、今日の紗矢華はいつも増してテンションが高い。

「なにを、じゃないわよ!」

雪菜よ、雪菜! 明日からあたたちの学校の学園祭なんでしょう!? 雪菜が主役で劇をやるって聞いたわよ!」

「ああ……そういえば、そんなことを言ってたな」

紗矢華が興奮している理由を察して、古城はぞんざいに呟いた。

雪菜たちのクラス、中等部三年C組は、彩昂祭の初日に体育館で演劇をやるらしい。本人は必死で隠していたが、雪菜が主役を演じるという噂は、比較的早い段階で古城の耳に届いていた。情報源はもちろん、古城の妹であるところの曉風沙である。

『そんな大事なことを、どうしてもっと早く教えてくれなかったの!? 主役よ、主役!』

古城の素っ気ない態度を咎めるように、紗矢華が早口でまくし立ててくる。

「なんで俺が、そんなことをおまえにいちいち報告しなきゃなんねーんだよ……だいたい劇つつても中学生のクラスの出し物だぞ?」

そもそも古城は雪菜から、紗矢華に劇のことを教えるなど嚴重に口止めされていた。雪菜のことを溺愛している紗矢華

が、任務を放り出して彩海学園に押しかけて来る可能性があったからだ。

『うるさいっ！ ああもう、今からじゃ席の予約が間に合わないじゃない！ いえ、それよりもカメラ……カメラを買わなきゃ……むしろプロのカメラマンを雇うべき！』

『ていうか、おまえ、獅子王機関の任務中じゃなかったのか？どこからそんな情報を仕入れてきたんだ？』

古城が困惑しながら訊き返す。紗矢華は絃神島の住民ではないし、彩海学園にいる知り合いも多くはないはずだ。

『情報を提供してくれた人がいるのよ。なんでも彩海学園に密偵を放ってるらしくて』

『密偵!? 誰だ、その物騒な情報提供者ってのは……!?』

『ふふっ、わたくしです』

紗矢華の代わりに答えてきたのは、気品に満ちた優雅な声だった。かすかに外国の訛りがあるが、ほぼ完璧な日本語だ。

『その声……! ラ・フォリアか!?』

『ご名答。お久しぶりですね、古城』

日本語に堪能な美貌の姫君が、驚く古城を無視してマイペースに告げる。

北欧アルディギア王国の正統な王女、ラ・フォリア・リハヴァイン。心優しく聡明で、国民からの絶大な人気を誇るという、絵に描いたようなお姫様だ。だが実は、古城は彼女のことを少々苦手だった。頭が良すぎてなにを考えているのかよくわからない上に、たまに腹黒く感じられて恐ろしかったりするからだ。

「……煌坂と一緒にいるってことは、もしかして、あんたも絃神島に来てるのか？」

不吉な予感を覚えて古城が訊く。ラ・フォリアは悪戯っぽい声でクスクスと笑い、

『来賓として国際会議に出席したついでに、休暇を兼ねて立ち寄ったのです。彩海学園のスクールフェスティバルのことは、ユステイナからの報告書にありましたから』

『待て、まさか彩昂祭に来るつもりじゃないだろうな!?』

『なにか問題がありますか？ お祭りの期間中、生徒の関係者は自由に学園に出入りできるとパンフレットに書かれていましたか?』

ラ・フォリアが淡々と指摘した。いろいろとややこしい事情があって、彼女は血縁上、彩海学園中等部の叶瀬夏音の姪という立場になる。間違いなく生徒の関係者なのだ。

『そ、それはそうだけど、あんた、世界的な有名人じゃねーか！ウチみたいな普通の学校の文化祭にまぎれこんでたらパニックになるだろ!』

『それでしたら心配はありません。わたくしの素性に気づかれないよう、きちんと変装しておきますから』

『いや、変装って……』

古城は思わず絶句する。悪い予感しかしなかった。なにしろラ・フォリアは美の女神の再来とも讃えられる美貌の持ち主だ。ちよつとやそつとの変装で誤魔化せるとは思えない。

そんな古城の焦りをよそに、ラ・フォリアは声を華やかに弾ませて、

「あれ……なんだ、その荷物？」

「こ、これは演劇で使う衣装です。これからリハーサル予定があるので」

雪葉はそう言って、衣装を自分の背後に隠した。彼女の慌てぶりを古城は疑問に思いつつ、

「リハーサル……そうか、煌坂のやつ知ってたな！ それでラ・フォリアを止めなかったのか」

「ラ・フォリア王女？ 彼女がどうかしたんですか？」

雪葉がきょとんと首を傾げる。古城は苦悩するようにうつむいて溜息をついた。

「ついさっき連絡があったんだ。あいつ、今から彩海学園に遊びに来るらしい」

「遊びに来るって……紗矢華さんも一緒ですか？」

表情を硬くして雪葉が訊いた。古城は肩をすくめてうなずき、

「ああ、たぶんな。姫終が劇に出ることも知ってたみたいだし」

「なっ!?」

「いちおう変装してくるとは言ってたから、騒ぎを起こすつもりはないんだろうけどな。姫終のリハーサルを見学して、さっさと帰ってくればいいんだが……」

「け、見学……!?」

古城の呟きを聞きつけて、雪葉は声を震わせた。いつになく追い詰められたような態度で、彼女は勢いよく首を横に振る。

「駄目です、それは駄目！ 見学なんて絶対に駄目です!」

『まあなく彩海学園に到着するところです。あなたや夏音に会えるのを楽しみにしています。では古城、また後ほど』

「ちよつ……待て、ラ・フォリア! 煌坂も止めろっ! おうっ!」

携帯に向かって古城が怒鳴るが、そのときにはすでに応答は途絶えていた。

騒がしい廊下の片隅に立ち尽くして、古城は呆然と天を振り仰ぐ。

「勘弁してくれ……!」

携帯を握り締めたまま古城は軽く放心していたが、そんなことをしている場合ではないとすぐに気を取り直す。彩海学園に辿り着く前にラ・フォリアたちを捕まえて、彼女たちが騒ぎを起こすのを、なんとか喰い止めなければならぬ。そう思って走り出そうとした古城を、たまたま通りかかった中等部の女子生徒が呼び止めた。

「あの、なにかあったんですか、先輩？」

「姫終! ちようどいいところに!」

「はっ?」

大きな瞳を瞬きながら、雪葉が古城を見上げてくる。どうやら彼女も彩昂祭の準備で、校内を移動中だったらしい。雪葉が抱えている大きな荷物に気づいて、古城は怪訝そうに眉を寄せ、

「いやでも、せっかく姫様が主役なんだし」

観客は多いほうがいいだろ、と古城は軽い気持ちで言い返す。その瞬間、雪葉はなぜか焦ったように視線を彷徨^{さまよ}わせ、「え!? ええ、まあ、主役といえば主役です、けど……とにかく紗矢華さんたちを絶対に近づけないようにしてくださる!」

「それって、本番までは部外者に見せられないってことか?」

「ほ、本番も見に来ては駄目です! 特に紗矢華さんと先輩は!」

「いやでも、風沙^{ふうさ}も出るって言ってたし」

「と、とにかく駄目と言ったら駄目ですから! わたしはリハサルに行きますけど、絶対にのぞきに來たりしないてくださいいね!」

どこか必死な口調でそう言うと、雪葉は小走りに体育館へと向かっていった。古城は啞然としながら彼女の後ろ姿を見送る。どうして雪葉がそんなにも焦っているのかわからない。

「って……こんなことしてる場合じゃねえ!」

校舎の外から聞こえてきたどよめきに気づいて、古城は慌てて走り出す。

人々の驚きの原因は、正門前に停まった一台の乗用車だった。国賓が大富豪でもなければ、一生乗ることのなさそうな黒塗りの高級リムジンである。たかが学園祭にそんな大げさな車で乗りこんで来る人物など、ラ・フォリアたち以外に考えられない。

「あいつら、あんな目立つ車で乗りつけやがって! 変装な

漠然と嫌な予感を覚えながら、古城は楽器ケースを抱えて立ち上がった。そのとき近くから聞こえてきたのは、不吉な地縛霊^{じばくれい}を連想させる小さな啜り泣きの声だった。

「こ、子どもの泣き声……?」

古城は頬を引き攣らせてうめく。迷子という可能性は考えなかった。学園祭当日ならいざ知らず、開催前日の夕方近くに、小さな子どもを連れて遊びに来る父兄がいるとは思えない。

それほど歴史の古い学校ではないが、彩海学園にも学校の怪談のひとつやふたつは伝わっている。特に学園祭準備期間ともなれば、泊まりこみの生徒が幽霊を目撃した、という噂話には事欠かなかった。おまけにここは「魔族特区」——本物の霊能力者や死霊魔術師^{ネクロマンス}がうようよ暮らしている土地なのだ。古城が真っ先に幽霊を警戒したのは、むしろ当然の反応であった。

そしてその直後、啜り泣きが聞こえてくる方角から、誰かの声が古城を呼んだ。

「古城。こちらです、古城」

「……ラ・フォリア?」

特徴的な王女の口調に、古城は安堵しながら振り返る。不気味な啜り泣きはまだ続いていたが、少なくともラ・フォリアは、ほかの生徒たちに気づかれずに上手く校内に入りこめたらしい。

しかし声の方角に視線を向けても、ラ・フォリアらしき人物はいなかった。もちろん紗矢華の姿もない。魔術で姿を隠

んか意味ねーじゃねーか!」

額に脂汗を浮かべて、古城は正門へと向かった。今さら手遅れかもしれないが、これ以上の注目を集める前に、ラ・フォリアたちを隠さなければならぬと思ったのだ。が、

「……のわっ!」

走り出して何歩も進まないうちに、古城は勢いよく転倒した。地面に落ちていた誰かの荷物に蹴躓^{けつそ}いてしまったのだ。演奏用キーボードなどを運ぶための楽器ケースである。

「痛てて……って、この楽器ケース……たしか、煌坂の……?」

見覚えのある楽器ケースを拾い上げて、古城は軽く混乱した。

紗矢華が持ち歩いている楽器ケースの中身は、「煌華麟^{こうかりん}」と名付けられた銀色の長剣だ。疑似的に空間をも斬り裂くという獅子王機関の試作兵器であり、普通に物騒な刃物でもある。そんな危険なアイテムを、校庭に放り出しておいていいはずがない。

しかし周囲を見回してみても、紗矢華の姿は見当たらなかった。

長身でスタイルのいい紗矢華は、ラ・フォリアに負けず劣らずよく目立つ。人混みの中にもすぐにわかるはずだ。それなのに古城は彼女を見つけることができなかった。「煌華麟」入りの楽器ケースを置き去りにしたまま、紗矢華はどこかに消えてしまったのだ。

「……どういことだ?」

しているのだろうか、と古城は不審に思う。

「ラ・フォリア? どこかに隠れてるのか?」

「なぜ、わたくしが逃げ隠れる必要がありますか」

どこか舌足らずな幼い声が、古城のすぐ近くから聞こえてくる。校舎脇の記念樹の根元に立っていたのは、幼い外国人の少女だった。

年齢は四、五歳といったところだろうか。銀髪碧眼^{ぎんぱつへきがん}の可愛いらしい娘だ。

彼女が羽織^はっているのは、軍隊の儀礼服に似た大人向けのブレザー。当然、袖口はぶかぶかで、上着の裾^{すそ}を地面に引きずっている。

「ですが、少々厄介なことになってしまったようです。力を貸してもらえますか、古城?」

銀髪の幼女が、親しげな口調で古城に呼びかける。

古城は戸惑いながら彼女を見返した。外国人の幼女に知り合いいない。しかし彼女とは初対面という気がしなかった。天使めいた美貌と高貴な雰囲気。目の前の幼い少女には、アルディギア王女の面影^{おもかげ}がくつきりと残っている。

「お、おまえ……もしかしてラ・フォリアか? じゃあ、そっちのはまさか……煌坂?」

古城が震える声で質問した。

銀髪の幼女の背後には、淡い栗色の髪の幼女が立っている。ぶかぶかのサマーセーターとワイシャツは、紗矢華が普段着ている制服と同じだった。

怯えたような眼差しで古城を見上げた第二の幼女が、銀髪

の幼女の背中に隠れて嗚咽^{おんげん}を始める。先ほどから聞こえていた不吉な囁き泣きは、彼女の口から洩れていたのだ。

「ええ、いかにも。わたくしはラ・フォリア・リハヴァイン。アルディギア王国で王女の立場にある者です」

泣きじゃくる舞威媛^{まゐりひめ}を慰めながら、銀髪の幼女は、優雅に微笑^{ほほえみ}んで古城に告げる。

古城はそんな彼女たちを凝視して、呆然と立ち尽くすだけだった。

4

独房の扉は開いていた。人工島^{アイランド}北地区の最下層。魔導犯罪者を収容するための特殊拘置所だ。

「脱獄……か。見事にもぬけの殻だな」

無人の独房を一瞥して、南宮那月が無愛想に呟いた。西洋人形のような豪奢なドレスを身に着けた小柄な女性だ。見た目は十一、二歳の愛らしい少女にしか見えないが、案内役の刑務官の目には、彼女に対する恐怖の感情が滲^{にじ}んでいる。南宮那月は国家攻魔官。かつて欧州で数多の魔族を恐怖のどん底に突き落とした強力な魔女なのだ。

「申し訳ありません。朝の定時巡回では、異常は発見されなかったのですが」

刑務官がたどたどしい口調で弁解した。拘置所内に収監されていた魔導犯罪者二名の脱獄が発覚したのは、六時間ほど前のこと。すでに捜索は始まっていたが、脱獄犯の行方は今

もわからないままだった。那月が呼び出されたのは、それが理由だ。脱獄犯の追跡に協力して欲しい、というのが拘置所からの依頼だった。

「封印の呪符^{じゅふ}が破られていない……魔術が使われたわけでは無いのだな」

独房の扉を確認して、那月は意外そうに眉を上げた。

扉に刻みこまれた魔術の機能は、今も効果を失っていない。つまり、魔術的な手段によって強引に檻をこじ開けたわけではない、ということだ。

「魔術拘束具は正常に作動していました。そもそも彼女たちは「守護者」を失ってますし、拘置所内の妨害^{ジャミング}を無効化できるほどの強力な魔術を使えたとは思えません」

「自力での脱獄は不可能ということか」

「は、はい。そのための特殊拘置所ですから」

説明を続ける刑務官を、那月は無表情に見返した。

「だとすれば脱獄を手助けた共犯者がいたということになるが？」

「いえ……それが、監視装置をチェックした限りでは、侵入者の痕跡^{こんし}は発見されませんでした。魔術的な結界だけでなく、音響、感圧、赤外線などの電子的センサーにも一切反応がなく……」

「外部からの侵入者はなかったということか……まあ、たしかに、組織の連中が危険を冒してまで助けに来る価値が、あの二人にあると思えんしな」

「ど、同感です。だからこそ我々も混乱しておりまして……」

いったいどのような手段を使って、彼女たちは独房から抜け出したのか……」

刑務官が、途方に暮れた表情で呟いた。

魔導犯罪者の脱走を許したとなれば、拘置所職員の責任問題は免れない。少しでも処分を軽くするためにも、脱獄の手段を早期に解明したいというのが彼らの本音なのだろう。

しかし那月は、そんな刑務官を冷やかに睨^{にら}めつける。

「なるほどな。だが、脱獄のトリックを調べさせるためだけに、わざわざ私を呼び出したわけではあるまい？ おまえたちが焦っている本当の理由、そろそろ聞かせてもらおうか？」

「は……はい。そ、そうですね」

刑務官は表情を強張^{こわば}らせながら、額に浮いた汗を拭った。

「これは、その、決して口外しないでいただきたいのですが……実は、人工島管理公社で保管していた例の事件の証拠品の一部が、行方不明になっておりまして」

「証拠品？」

那月が不機嫌そうに目を眇^{めが}める。刑務官はぎこちなくうなずいて、

「No.014」です。状況的に、おそらく彼女たち二人によつて盗み出されたのではないかと」

「ああ……そういうことか。くだらん」

那月が、ふん、とつまらなそうに鼻を鳴らした。それきり彼女は興味をなくしたように、無人の独房に背中を向ける。

「み、南宮攻魔官？」

「事情はわかった。それなら私は本業のほうに戻らせてもら

おう。学園祭の前日ということで、教師の仕事もなにかと忙しくてな」

「え、いや、しかし脱獄犯は……!？」

刑務官が哑然としたように訊き返す。しかし那月の返事はにべもない。

「放っておけ」

「で、ですが……」

「わざわざ「No.014」を持ち出したということは、やつらの目的は復讐^{ふしゅう}だ」

「復讐……ですか？」

「だとすれば、行き先もおおよそは見当がつく。つまらないことを考えたものだ。気持ちばかりでもないが、相手が悪かったな」

「は、はあ……」

刑務官が疑問符混じりに嘆息した。どういう根拠があるのかは知れないが、とにかく那月は、今回の脱獄犯には、たいした危険性はないと判断したらしい。

「問題は、あの二人よりも、やはりこいつか……」

那月はそう呟いて、拘置所の天井に視線を向けた。無言で那月たちを見下ろしていたのは、無機質な眼球に似た監視カメラだ。

「外部からの侵入者が本当にいなかったのだとしたら、やつらの脱獄に手を貸したのは誰だ？ 魔術を封じられていたはずのやつらが、どうして証拠品の在り処を知っていた……?」

自ら口にした疑問の答えを出さないうまま、那月は空間を歪

めて、虚空に溶けこむように姿を消した。置き去りにされた刑務官が、彼女を追いかけて走り出す。

通路に取り残されたのは、作動中の監視カメラだけだった。ギギツ、と嘲るような不快な雑音が、どこからともなく聞こえて、すぐに消える。

5

「固有堆積時間操作の魔導書？」

銀髪の少女と向かい合って座る古城が、深刻な表情で呟いた。

「それって、たしか仙都木阿夜が持ってた本だな。"No.014"とか呼ばれてた……」

「ええ。"図書館"の総記だけが閲覧を許された禁断の書物——他人が経験した時間そのものを奪い取る呪われた魔導書です」

ラ・フォリア・リハヴァインを自称する銀髪の少女が、舌足らずな口調で解説する。

ライブラリ・オブ・クリミナル・オーガニゼーション——通称「図書館」。それは国際的な魔導犯罪組織の名称だった。古城たちは二週間ほど前の波瀾院フェスタで、その「図書館」に所属する魔女たちと敵対し、結果的に彼女たちの逮捕に協力することになったのだ。

「No.014」は、その事件の最中に、「書記の魔女」こと仙都木阿夜が使った魔導書だった。魔導書に記された能力は、相

手が経験した「時間」そのものを奪うこと。固有堆積時間を奪われた者は、肉体年齢が若返るだけでなく、成長の過程で経験したすべての記憶をなくしてしまう。使い方しだいでは、いかなる強敵をも無力化する、極めて危険な魔導書だ。

「那月ちゃんを少女に変えたやつか。じゃあ、ラ・フォリアたちが今の姿になったのも……」

「魔導書による魔術攻撃でしょうね」

攻撃を受けた張本人であるラ・フォリアが、他人事のように淡々と答えてくる。仙都木阿夜の魔導書の威力は、古城もよく知っていた。実際にラ・フォリアたちが幼児化している以上、再びその書物が使われたのは間違いないだろう。

ラ・フォリアが自らの異変に気づいたのは、彩海学園に到着した直後のことだったらしい。魔術的な防護結界が施されたリムジンを降りた、一瞬の隙を衝かれたのだ。

「だけど、いったい誰がなんの目的でこんなことを……？」

古城の疑問に、ラ・フォリアは静かに首を振る。

「わかりません。わたくしには誰かに恨まれる心当たりなどありません」

「え？ いや、そんなこと言い切っちゃって大丈夫なのか……？」

あまりにも堂々と言い放つラ・フォリアに、むしろ古城のほうがうろたえた。なにしろラ・フォリアは一国の王女だし、おまけに意外と腹黒だ。あちこちで妬みや恨みを買っているも、まったく不思議ではないと思う。

しかし王女は、迷いなくきっぱりとうなずいて、

「もちろんです。だとすれば、やはり狙われたのは紗矢華でしようか。獅子王機関の舞威媛ともなれば、知らないところで犯罪者に恨まれていてもおかしくありませんから」

「前から思ってたけど、あんたもいい性格してるよな………本当に」

「ふふっ、よく言われます」

半ば本気で感心する古城に、ラ・フォリアはにこやかに微笑んでみせた。

古城はそんな王女の態度にふと違和感を覚えて、隣にいる紗矢華と見比べた。古城と目が合った瞬間、幼児化した紗矢華は怯えたように後ずさって、ラ・フォリアの背後で身を竦める。

「なあ……煌坂がこんなふうになっちゃってるのは、魔導書に記憶を奪われたせいなんだろう？ どうしてあんたは俺のことを憶えてるんだ？」

ほとんどの記憶を失った紗矢華は、肉体だけでなく精神面も完全に幼児化している。仙都木阿夜に攻撃されたときの那月と同じ症状だ。しかしラ・フォリアの性格に変化はない。王女の記憶は奪われていないのだ。古城はそのことを疑問に思う。

「それはこの護符のおかげでしょう」

ラ・フォリアはそう言って、胸元に隠れていたペンダントを取り出した。緑色の宝石を縁取る黄金のペンダントトップには、精緻な魔法文字が刻みこまれている。

「アルディギア王家に伝わる神器です。持ち主の魂を呪詛や

災いから護るといわれています。精神攻撃系の魔術を無効化する個人用防護障壁といったところでしょうか」

「よくわからんが、強力な御守りみたいなものか………それで身体は若返っても、記憶は奪われなかったんだな」

「ええ。ですが、さすがに困りました。この姿では公務に差し支えてしまいます。魔術攻撃を仕掛けてきた輩が、わたくしたちを幼児化しただけで満足するとも限りませんし」

ラ・フォリアが物憂げに目を伏せる。

「そうか………たしかに今の煌坂にあなたの護衛は無理だよな」

涙目になっているポニテールの少女を見つめて、古城は弱々しく息を吐いた。

今の紗矢華は魔導書の呪いによって、呪術の知識や戦闘経験のすべてを奪われてしまっている。つまり見た目どりの無力な少女なのだ。ラ・フォリアを護衛するどころか、自分の身を護ることすら困難だろう。

そんな事態の深刻さを理解してか、ラ・フォリアは真顔で自らの胸元を見下ろして、

「そうですね。わたくしとしても、この身体では、古城との夜の営みもままなりませんしね」

真面目に王女の言葉を聞いていた古城が、ぶほっ、と激しく咳きこんだ。

「なにさらつと恐ろしいことを言ってるんだあんたは!? どうでもいいだろ、そんなことは！」

「……それはつまり、古城は、少女の肉体にも興奮を覚える、という意味でしょうか？」

銀髪の幼女が、少し驚いたように訊いてくる。

「全然違うわっ！　そういう危険な発言はやめろっ！」

「いけません、古城。そんな大きな声を出しては……」

ラ・フォリアが、めずらしく焦ったように古城を制止した。そんな王女の隣で、ひくつ、と怯えたようにしゃくり上げる声が出た。

幼児化した紗矢華が身体を硬くして、涙で潤んだ瞳を古城に向けている。突然大声を出して怒鳴る古城にびっくりしたらしい。

「あ！　き、煌坂……!？」

今にも泣き出しそうな紗矢華に気づいて、古城は本気でうろたえた。

学園祭準備期間ということで大勢の生徒たちが行き交う中、幼女二人を連れた古城の姿は、それでも目立っているのだ。こんなところで紗矢華に号泣されたら、彼らにどんな目で見られるか、想像するだけでも恐ろしかった。

「……いじめるの？　おにいちゃんも、さやかのことをいじめるの……?」

狼狽する古城を不安そうに見上げて、紗矢華は、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、と謝罪の言葉を繰り返す。そんな紗矢華の行動を目撃した通りすがりの生徒たちが、ヒソヒソと噂話を始めていた。

「そういうやつ、男性恐怖症になった過去のトラウマがあるんだっけか……」

周囲からの非難の視線を浴びながら、古城は弱々しく呟い

た。

生まれつきの強大な霊力のせいで、幼いころの紗矢華は、父親に暴力を振るわれていたらしい。紗矢華が男性全般を嫌っているのは、そのことが原因だったと聞いている。

幼児化した今の紗矢華には、当時の恐怖が生々しく残っているのだろう。古城を見て怯えるのも無理はない。

「大丈夫ですよ、紗矢華。古城は恐くありません。本当はあなたのことが大好きなんですよ」

怯える紗矢華を勇気づけるように、ラ・フォリアが優しい口調で言った。

その言葉を聞いた涙目の紗矢華が、なけなしの勇気を振り絞って古城を見上げてくる。

「……ほんと？　おにいちゃん、さやかが好き?」

「お、おう……まあ嫌いではないな……」

真つ直ぐな瞳に気圧されながら、古城は正直にそう答えた。その瞬間、紗矢華の表情が、わずかに年相応の明るさを取り戻す。「さやかとけっこんしてくれる?」

「け、結婚って……いや、さすがにそれは……」

幼児特有のいきなりの話題の飛躍に、古城は焦る。

ただの子どもが相手なら適当に言いくるめておけば済むことだが、この幼女の中身は紗矢華なのである。ここで迂闊な約束するのは、なんとなくヤバイ予感がした。あとで紗矢華が記憶を取り戻したときに、なにを言われるかわからない。

そうやって逡巡する古城を見ていた紗矢華が、じわつ、と再び涙を滲ませる。

「やつぱりさやかのことなんか好きじゃないんだ」

「い、いや、そんなことはないぞ。わかった。おまえが大きくなったら、そのときにもう一度話し合おう。な?」

「おおきくなったらけっこんしてくれるの?」

紗矢華が上目遣いで怖ず怖ずと聞いてきた。

「あー……もうそれでいいや。わかった。おまえが大きくなったらな」

古城はなにもかもが面倒臭くなって投げやりに応えた。まあ、とラ・フォリアが目大きくして意味ありげに微笑む。

紗矢華は照れたように頬を赤らめながら、そっと古城の横に近づいた。ようやく彼女が懐いてくれたことに、古城はホッと胸を撫で下ろす。

幼児化した紗矢華の足元にハラリとなにかが落ちたのは、その直後のことだった。

「つて、煌坂……こ、これっ!？」

紗矢華の身体からずり落ちてきたのは、彼女の制服のスカートとワイシャツだけだ。そのワイシャツも実は胸元がだぶだぶで、うっかりすると素肌が見えてしまいそうになる。

「身体が小さくなってしまったせいで、服のサイズが合わないようになってしまったのですね」

ラ・フォリアが冷静な口調で指摘した。そういう彼女も、サイズの合わない服を着ているという意味では同じ立場だっ

たりするのだが。

「それはわかるけど、どうすりゃいいんだ。さすがにこの恰好の幼女を連れ回すのは危険すぎるぞ、主に俺が!」

古城は、かつてなく追い詰められた表情で頭を抱える。ノパンの幼女を連れ回していた、という事実が通報されてもしたら、間違いない古城の人生は終わりだ。世界最強の吸血鬼の力をもつとしても、この苦境は乗り切れそうにない。

「わたくしたちは子供服に着替えたほうがよさそうですね」

苦悩する古城をさすがに哀れんだのか、めずらしくラ・フォリアが建設的な意見を口にした。

「いや、だけど子供服なんていったいどこに……」

「あれは売り物ではないのですか?」

そう言ってラ・フォリアが指さしたのは、校庭にずらりと並んだ模擬店の列だった。生徒会の有志が主催しているチャリティバザーだ。生徒が家から持ち寄った不要品や古着が、ワゴンの上に所狭しと展示されている。その中にはおそらく子供服もあるはずだ。

「そうか……!」

希望に顔を輝かせて、古城は校庭へと走り出す。幼女二人を引き連れて子供服を物色し始めた古城の姿を、バザー会場にいた生徒たちが、ギョツとしたような表情で見つめていた。

結論からいえば、いちおう子供服らしきものは手に入った。

ただし正確には、幼児向け変身美少女アニメのコスプレ衣装である。どうしてもそれを着たいとラ・フォリアが駄々をこね、同じく紗矢華にも涙目でおねだりされたのだ。

「大丈夫か、煌坂。一人で着替えられるな？」

更衣室前の廊下で紗矢華が着替えるのを待ちながら、古城はぐったりと溜息をついている。

「とりあえず服はこれでいいとしても……根本的な解決にはなっていないだよな」

「そうですね。魔導書の呪いを解かないことには」

ヒラヒラしたコスプレ衣装に身を包んだラ・フォリアが、真面目な顔で相槌を打つ。それだけでなく妖精めいた容姿の彼女に、アニメキアラの衣装は異常なほどに似合っていた。通りすがりの女子生徒たちに写真撮影を頼まれたのも一度や二度ではない。

「なあ、やっぱりあんたのところの騎士団に連絡を取ったほうがいいんじゃないのか？ アルディギアには宮廷魔導技師だっけ……叶瀬の親父さんみたいなのがいるんだろ？」

「いえ……残念ですが、宮廷魔導技師の力をもってしても魔導書の呪いを解除するのは容易なことではありません。それに宮廷魔導技師や騎士団は、アルディギアの国家機密を知悉しています。魔導書の力で、彼らの記憶を奪われることだけは避けなければ」

「そうか……そういう問題もあるのか」

説得力のあるラ・フォリアの言葉に、古城は反論できなかった。敵の正体や目的は、なにもわかっていないのだ。今の

状況で迂闊に救援を求めても、犠牲者が増えるだけかもしれない。

「もつとも確実な解呪の方法は、わたくしたちを攻撃してきた術者を捜し出して、魔導書を奪うか破壊することなのですか」

「なるほど……そういうや那月ちゃんも、同じことをやってたな」

古城は、仙都木阿夜と戦ったときの那月の行動を思い出す。自らにかけられた呪いを解除するために、那月は幼児化した姿のまま、阿夜から魔導書を奪うチャンスを狙っていたのだ。

「そうか、あの人なら魔導書の呪いを解く方法を知ってるんじゃないか？」

「『空隙の魔女』南宮那月……ですか。彼女の助力が得られれば、たしかに心強いですね」

ラ・フォリアが古城の提案に同意する。

「この時間ならまだ校内にいるはずなんだが、どうやって捜したもんな……」

古城はおもむろに立ち上がり、生徒たちであふれた校舎内を見回した。

国家攻魔官と教師を兼業している那月は、ああ見えて忙しい人間だ。特に彩昂祭の期間ともなれば、校内の見回りや、来賓の応対などで、どこにいるのか見当もつかない。

「『空隙の魔女』を見つければいいですね。では古城、そこに跪きなさい」

名案を思いついた、と言わんばかりの態度で、ラ・フォリアが尊大に命じてくる。

「いいけど、いったいなにをする気だ？」

訝しみつつも古城は彼女に言われるままに、その場で姿勢を低くした。そんな古城の肩の上に、幼児化したラ・フォリアがよじ登ってくる。

「もう立ち上がっても良いですよ」

「肩車か……まあ、この際、仕方ないか」

古城は複雑な表情で独りごちた。本物の幼児ならともかく、ラ・フォリアを肩車するという状況はいろいろと問題な気もするが、深く考えるのはよそう、と自分自身に言い聞かせる。と、

「ん？ なんだ、煌坂？」

ちょうど着替えを終えて出てきた紗矢華が、くいくい、と古城の制服の裾を引っ張った。

困惑しながら見下ろす古城に、幼児化した紗矢華が小さな両手を伸ばして、

「抱っこ……さやかも抱っこして……」

「え……!!？」

「だめ？」

ポニーテール幼女の瞳に、じわりと涙が盛り上がる。それに気づいた古城は慌てて彼女を抱き上げて、

「いや、もちろんだめじゃないぞ。ほーら、高い高い！」

古城に抱き上げられた紗矢華が、わあっ、と幸せそうな声を洩らす。

一方、周囲にいたほかの生徒たちは、幼女二人を抱きかかえている古城を、ものすごい不審者を見るような目つきで眺めていた。古城が彼らにロリコン疑惑をかけられたのは間違いないだろう。精神的に極めて厳しい状況だ。

「なんで俺がこんな目に……」

唇を強く噛みしめたまま、口の中だけで古城がうめく。ラ・フォリアは、そんな古城の頭を両手でつかむと、ぐいっと強引に九十度ほど右旋回させた。

「古城。あれを！」

「那月ちゃんか！ やばい、どっか出かけるのか!!」

首の痛みに耐えながら、古城は窓際に駆け寄った。フリルまみれのドレスを着た小柄な女教師が、校庭に停まったタクシーに乗りこむところだった。

彼女をこのまま見失ったら、次に会えるのはいつになるかわからない。古城は慌てて校舎を飛び出し、タクシーに駆け寄ろうとする。

そのとき古城に抱かれたままの紗矢華が、突然、切羽詰まった声で古城を呼んだ。

「おいちゃん！」

「煌坂!! 今度はなんだ!!」

「お、おしっこ……」

「なっ!? なに……っ!!」

動揺する古城の腕の中で、紗矢華がもじもじと身体をよじる。今まで言い出せずにずっと我慢していたのだろう。うつむいている紗矢華は今にも泣き出しそうだ。

「な、なあ……煌坂。あとちょっとだけ我慢できないか？」
「うう……」

ぼろぼろ、と大粒の涙が紗矢華の頬をこぼれ落ちる。
「わかった！ わかったから泣くな！ こ、ここからいちばん近い女子トイレは——！」

古城は絶望を覚えながら、紗矢華を抱いて校舎の中へと後戻りする。

那月を乗せたタクシーが静かに走り出し、彼方へと遠ざかっていくところだった。

7

それから一時間も経たないうちに、古城はぼろ切れのように疲れ果てた姿で、廊下の隅にうずくまっていた。幼児化したラ・フォリアと紗矢華の面倒を見ているうちに、体力が尽きてしまったのだ。なにしろ子どもという生き物は、片時もじっとしていてくれない上に、こちらが予想できないトラブルを引き起こす。男子高校生一人で子ども二人を相手にするのは、やはり無理があったらしい。

「駄目だ……俺一人じゃ身が保たん……」

古城はぐったりと背中を丸めて溜息をついた。幼児特有の突発的な言動と底なしの体力に振り回されて、古城の消耗は限界に達していた。これが敵の狙いだとしたら、見事な戦略というよりほかにない。生半可な魔術攻撃よりも、遥かに効果的だった。

んだよ。演出とかアクションとか」

「ああ……なるほど、孫悟空か。そういえば姫終に似合うよな」
風沙の補足説明を聞いて納得した古城が、ぼつりと余計なひと言を呟いてしまう。

当然のように、むっと眉を吊り上げる雪菜。

「……あの、それはどういう意味ですか……？」

「あ、いや、姫終がサルっぽいってことじゃなくて、ほら、如意棒と槍ってちょっと似てるし」

古城が早口で言い訳する。雪菜は、むうっ、と唇を尖らせたまま、

「ええ、まあ。棍と槍の技術には共通した部分がありますけど……あの、それよりも……」

今イチ納得していないような口調でそう呟いて、雪菜はラ・フォリアたちへと視線を向けた。

それを見て風沙もようやく、幼女二人の存在に気づいたらしい。コスプレ衣装を着たラ・フォリアと紗矢華の姿に、風沙はたまらず歓声を上げる。

「わっ……かつ、可愛いっ！」

ハゲヅラをその場に投げ捨てた風沙が、幼女たちへと駆け寄っていく。紗矢華が驚いてラ・フォリアの背中に隠れようとするが、風沙はそんなことお構いなしに二人まとめて抱き寄せた。

「すごいよ、古城君！ どこでこんな可愛い子たちを拾って来たの!? あれ、でも、なんだろう、どこかで会ったことがあるような気が……？ まあいつか！」

ちなみにラ・フォリアと紗矢華の二人は、近くの非常階段に腰掛けて、仲良くジュースを飲んでいる。甘いものを与えている間だけは、彼女たちも大人しくしてくれるのだ。
「あれ、古城君？」

うずくまっている古城の背中に、誰かが声をかけてきた。のろろと振り返った古城が見たのは、奇妙な衣装を着た風沙と雪菜だった。風沙が身につけているのはハゲヅラと僧侶の袈裟。そして雪菜は、なぜかサルの着ぐるみに全身を包んでいる。

「せ、先輩!? なんでこんなところにいるんですか……っ!?」
頬を真っ赤にした雪菜が、咎めるような口調で古城に訊いた。

なんでもと言われても、と古城は頼りなく首を傾げて、
「おまえら……なんだ、その恰好……？」

「演劇で使う衣装だよ。今ちょうどリハーサルが終わったところなんだよね」

さすがにハゲヅラが恥ずかしいのか、風沙が照れながら返事をする。そうなのか、と古城は無気力にうなずきつつも、

「いやでも、なんの衣装だ、それ？ ていうか、姫終は主役じゃなかったのか？」

「うう……ええ、まあ、主役といえば主役です。あみだくじで決まったんですけど」

雪菜がなぜか恨みがましい目つきで古城を睨んでくる。着ぐるみ姿を見られたのが、よっぽど屈辱だったらしい。

「うちのクラスの演目は西遊記だからね。けっこう本格的な

細かいことには頓着せずに、ラ・フォリアたちに頼ずりする風沙。一方、雪菜は、硬い表情で古城を見上げ、

「先輩、もしかしてこの二人……」

「ああ。ラ・フォリアと煌坂だ」

苦々しげな声で古城が言う。雪菜の瞳に驚きの色が広がった。

「固有堆積時間操作の魔導書ですか？ まさか、誰かが王女を狙って？」

「たぶん……なあ、そういや姫終の槍で、こいつらを元には戻せないか？」

かすかな期待をこめて古城が訊いた。しかし雪菜は残念そうに首を振る。

「いえ……『雪霞狼』の魔力無効化能力でも、魔術攻撃によって生じた結果をなかったことにはできません。魔導書の本体を攻撃できればべつですけど……」

「そう都合よくはいかないってことか……」

古城が深く溜息をついた。おそらくラ・フォリアたちの固有堆積時間は、魔導書の中に封印されている状態なのだろう。魔導書そのものを破壊できれば、奪われた「時間」は本来あるべき場所へと戻る。しかしラ・フォリアたちに「雪霞狼」で触れたところで、そこにない「時間」を取り戻すことはできないというわけだ。

「とにかく、わたしは『雪霞狼』を取ってきます。魔導書を使った犯人が、王女を襲ってくる可能性もありますし」
「わかった。頼む」

教室に向かって駆け出す雪菜を、古城は心強く思いながら見送った。敵が魔導犯罪者なら、剣巫である雪菜の存在はやはり頼もしい。それに幼児化したラ・フォリアたちの世話も、風沙に任せておけばいいだろう。できれば彼女たちは巻きこみたくなかったのだが、そんな贅沢を言っている場合ではない——そう思っただけで自分を納得させていた古城の目の前で、不意に雪菜の背中が揺れた。

着ぐるみに包まれた雪菜がよろめいて、ころんと頼りなく転倒する。

「姫終？ お、おい、大丈夫か……!?」

慌てて駆け寄った古城が見たのは、空気の抜けた風船のように、しなびた着ぐるみの手脚だった。雪菜の身体が二回以上縮んで、着ぐるみがぶかぶかになってしまっている。それが彼女の転倒の原因だ。

「ま……まさか、姫終まで……!?」

着ぐるみに包まれた雪菜の身体を、古城が恐る恐る抱き起こす。

そんな古城を見上げてきたのは、透き通るように綺麗な顔立ちをした幼い少女だった。推定四、五歳の幼女と化した雪菜が、唇を引き結んで懸命に泣くのをこらえている。

「お、おい……姫終……しつかりしてくれ……!」

「落ち着きなさい、古城」

雪菜を抱えたままうろたえる古城を、静かに歩み寄ってきたラ・フォリアが一喝した。

「いや、だけど、姫終が——」

分ですもの」

漆黒の女が、そう言っただけで艶めかしく笑った。

緋色の魔女と、漆黒の魔女。彼女たちの名前を古城は知っていた。波瀾院フェスタの日に、絃神島を襲撃してきた国際魔導犯罪者の姉妹——

「おまえら……たしか『図書館』の……!」

「お見知りおきいただき光栄ですわ、第四真祖」

身構える古城を蔑むように見返して、魔女姉妹が妖艶に微笑んだ。

「いかにも我らはLCO第一類『フィロソフィ』所属——エマ・メイヤーとオクタヴィア・メイヤー。そこな小娘どもに復讐するため、再び罷り越しましたの」

高らかに哄笑する魔女たちの手には、一冊の書物が握られている。

それは『No.014』。固有堆積時間操作の魔導書だった。

8

「なるほど……おばさま方でしたか」

ごく平静な態度で、最初に口を開いたのはラ・フォリアだった。魔女姉妹を眺める彼女の瞳には、むしろ白けたような落胆の感情が浮かんでいる。

「お、おばっ!」

何気に失礼なラ・フォリアの発言に、魔女姉妹が敏感に反応した。

「わかってます。ですが、雪菜が攻撃を受けたということは、魔術攻撃を仕掛けた術者がこの近くにいますということですよ。警戒を」

「そ、そうか……」

威厳に満ちた王女の忠告に、古城がようやく冷静さを取り戻す。しかし古城が周囲の確認を終える前に、新たな悲鳴が校庭に轟いた。

「風沙っ!」

静電気に似た青白い火花を散らして、風沙がぐつたりと倒れこむ。気絶した風沙を心配そうに抱き支えているのは、幼い紗矢華だ。

そんな紗矢華の首根っこをつかんで、無理やり抱き上げた人影があった。

一人は赤い装束をまとった女だ。異国の踊り子のような露出度の高い衣装。魔術師のローブを連想させる長い頭巾。すべてが血のような緋色で統一されている。

そしてもう一人の女は漆黒だった。鍔広の三角帽子と闇色のマント。そしてボンデージ衣装のような黒革のライダースーツで、全身をくまなく覆っている。

「あら、残念……この娘の時間も奪い取るつもりだったのですけど、魔導書の呪詛が防がれてしまいましたわ、お姉様。なにかに護られているのかしら」

気絶した風沙を見下ろして、緋色の女が不思議そうに呟いた。

「気にすることはなくてよ、オクタヴィア。人質の役には十

しかし銀髪の幼女はそれを無視して、可愛らしい仕草で肩をすくめる。

「わたくしたちへの意趣返しのために、年甲斐もなく脱獄なさったんですね。あれほどみつともなくやられておいて、まだ復讐する気力を失っておられないとは、素晴らしい打たれ強さです。わたくしも見習わなければなりませんね」

「お、おい、ラ・フォリア」

さすがにいろいろと心配になって、古城は銀髪の幼女を止めようとした。魔女姉妹の表情は怒りのあまり赤黒く変色して、今にも血管が切れそうだ。このままでは、逆上してなにをしかすかわからない。

「く、口の減らない小娘ですこと……」

「自分の立場がわかってらっしゃるのかしら、王女様」

漆黒の魔女がそう言って、倒れている風沙の隣に屈みこむ。

「風沙……!」

思わず飛び出そうとした古城を、漆黒の魔女が、瞳の動きだけで制止した。彼女が風沙の首筋に向けているのは短剣だ。古城に対する人質にするつもりなのだろう。

「動かないでくださいな、第四真祖。どうぞご心配なく。御身の妹君に危害を加えるつもりはありません」

緋色の魔女が、礼儀正しい口調で古城に告げる。

漆黒の魔女も短剣を構えたままうなずいて、憤怒の視線をラ・フォリアに向けた。

「わたくしたちが、その腹黒王女への宿怨を晴らすまで、御身はただ動かずにいてくださいなのです」

「く……」

古城がギリッと奥歯を鳴らした。風沙を人質に取られてしまつては、古城の力は使えない。強力過ぎる第四真祖の眷獣の攻撃は、確実に風沙を巻きこんでしまうからだ。

メイヤー姉妹は波瀾院フェスタの事件で、ラ・フォリアと紗矢華に敗北している。その復讐のために拘置所を脱獄して、彼女たちを狙っていたのだろう。

ラ・フォリアたちを幼児化させたあと、すぐに姿を現さなかったのは、古城の存在を恐れていたせいだ。しかし風沙を人質にしたことで、もはや古城を警戒する必要もなくなった。これで心置きなく恨みが晴らせると、二人の魔女は嗜虐的な期待に表情を歪めている。

「固有堆積時間操作の魔導書に頼らざるを得なかったということは、おばさま方はすでに魔女の力を失っているのですね」
猛々しく笑う二人の魔女を見返して、穏やかな口調でラ・フォリアが訊いた。

魔女姉妹は笑みを消しながら、不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「それがわかったからどうだというのかしら、王女様？」

「今のあなた方が相手なら、『守護者』の力を借りるまでもなく、たつぷり可愛がつてあげることができましてよ」

「いえ……それはどうでしょうか」

二人の魔女の挑発にも、ラ・フォリアは表情を動かさなかった。奇妙に無関心な王女の反応に、魔女姉妹は苛立たしげに唇を歪める。

「ああん？」

名状しがたい怪物の群れを凝視して、緋色の魔女が後ずさる。

「な、なんですの、こいつらは……!？」

「紗矢華が召喚した死霊ですね」

魔女の問いかけに答えたのは、ラ・フォリアだった。ふつくらとした頬に大人びた仕草で手を当てて、銀髪の幼女は淡々と告げる。

「し、死霊？」

「あとは闇の精霊に、よくわからない想念体のようなものも……」

ラ・フォリアが説明を続けている間にも、怪物たちは数を増していく。最初は曖昧だった死霊の輪郭が濃さを増し、そのおぞましい姿をくつきりと実体化させていた。

「ど、どうしてこんな子どもが、そんな化け物を召喚できるんですの!？」

恐怖に耐えかねた緋色の魔女が、抱きかかえていた紗矢華から手を離れた。

それでも紗矢華は泣き止まずに、ぐずぐずと肩を震わせている。幼い彼女が感じている恐怖そのものが、死霊たちを呼び集めているのだ。

「おい、ラ・フォリア……こっちゃんかヤバイ感じなんだが……」

古城が硬い声で助けを求めた。幼児化した雪菜の様子がおかしい。つぶらな瞳からはすべての感情が失われ、膨大な神気が彼女の周囲を渦巻いていた。

「この期に及んで強がりですか？ 往生際の悪い小娘です」と

「可哀想なおばさま方。『守護者』の力をなくしたせいで、お気づきにならなかったのですね」

殺気立つ魔女たちを哀れむように見返して、ラ・フォリアがゆるゆると首を振った。

同情混じりの王女の言葉に、緋色の魔女が、ぐぬ、とうめく。「こ、この小娘は、なにを言っているのかしら……ねえ、お姉様？」

しかし相槌を求められた漆黒の魔女が、彼女の呼びかけに答えることはなかった。

漆黒の魔女は、妹の横顔を見つめたまま、全身を硬直させて動きを止めている。

「オ、オクタヴィア……う、後ろ……」

震える声で、漆黒の魔女が告げた。

「……お姉様？」

人質である紗矢華を抱えたまま、緋色の魔女は、姉の視線につられて自分の背後を振り返る。その瞬間、彼女の顔からも血の気が引いた。

「……なっ!？」

見開かれた緋色の魔女の目に映ったのは、虚空に浮かび上がる不気味な影だった。

それは黒い霧のようでもあり、あるいは生物のようでもある。無数の地縛霊を取りこんだ悪霊か、あるいは死という概念そのものが形になって現れた存在だ。

校庭の気温が見る間に低下し、常夏の絨神島に粉雪がちらつき始めている。さっきまで快晴だった空は黒雲に覆われて、雷鳴が大気を震わせていた。

「神憑りですね。荒御魂というやつでしょうか。古城、くれぐれも雪菜に粗相のないように——」

ラ・フォリアが真面目な声で警告する。古城は蒼白な顔でうなずいた。

かつて雪菜から聞いた話を思い出す。幼いころの紗矢華は強すぎる霊力が制御できず、それが両親の虐待の原因になったのだ。そして雪菜もまた、その強大な霊力ゆえに、幼くして獅子王機関に保護されたのだ。

雪菜と紗矢華が幼児化したことで、二人が訓練によって身につけた霊力の制御技術は失われた。今の彼女たちは、些細なきっかけで暴発する危険な霊力の塊なのだ。

そして紗矢華の恐怖と、雪菜の怒りの矛先は、魔女の姉妹に向けられている。

「た、助けて、お姉様……!」

「や、やめ……やめさせなさい、ラ・フォリア・リハヴァイン! こ、こちらには人質が……」

軽いパニックに陥った漆黒の魔女が、気絶した風沙を楯にしようとする。しかし漆黒の魔女が握っていた短剣が、その瞬間、いきなり根元からへし折れた。

一瞬遅れて、銃声が響いた。

銃弾を撃ち放ったのは、ラ・フォリアだ。銀髪の幼女の手の中には、黒光りするオートマチックの軍用拳銃が握られて

いる。

「う、嘘!? ちょっ……あ、危ないでしょう!? や、やめっ!」
幼児化による照準の違和感を確認するように、ラ・フォリアは黙々と引き金を引き続けた。撃ち出された銃弾が頬をかすめて、漆黒の魔女が悲鳴を上げる。

「失礼、おばさま方。なるべく手加減するつもりですが、わたくしも、この身体での射撃には慣れていません。うっかり急所に当たってしまったときには、どうぞご容赦を」

ラ・フォリアが無責任な口調で言い放った。その間も銃撃は続いている。「守護者」を失った漆黒の魔女には、その攻撃を防ぐすべはない。なりふり構わぬみつももない姿で、彼女は、必死に逃げ惑う。

「お、お姉様……助けて……暗くて、深いところに引きずりこまれる……寒い……」

一方の緋色の魔女は、雪菜と紗矢華の霊力の暴走にまともに巻きこまれ、悲鳴を上げることすらできずにいた。凍える大気が彼女の体温を奪い、まわりつく死霊たちのせいで意識すら朦朧となっている。

「ま……待って、魔導書は渡すわ! 渡すから、許して! 助けて!」

魔女の姉妹は、ついに地面に突っ伏して、ラ・フォリアに懇願するように絶叫した。

「あら、もう終わりですか? 退屈な方たちですこと」

二人の魔女たちを見下ろして、銀髪の幼女がつまらなそうに呟く。

冷たく突き放すような口調で、那月が言った。

「……自分が子どもみたいな姿形をしてるくせに……痛てっ!」

思わず本音を洩らした古城を、那月が謎の见えない攻撃で殴りつける。そして彼女は、捕縛された魔女姉妹のほうへと向き直り、

「ひとつ聞かせてもらおう、メイヤー姉妹。拘置所の電子ロックを破ったのは、おまえたちの仕業か? どうやって独房の扉を開けた?」

「……そんなもの知りませんわ。ねえ、お姉様」

そっぽを向いたまま答えたのは緋色の魔女だった。漆黒の魔女も気怠げにうなずいて、

「ええ、そうね。わたしたちが気づいたときには、鍵が開いていましたの。魔術の妨害装置も止まっていたし」

「そうか……では、No.014の保管場所と王女の居場所をおまえたちに教えたのは誰だ?」

回収した魔導書を手の中で弄びながら、那月が再び質問する。

魔女の姉妹はしばし沈黙して、それからぼそりと口を開いた。

「声が聞こえたのですわ」

「……声?」

「ええ。拘置所のスピーカーから聞こえてきた声が、私たちが案内してくれたのです。妙な笑い方をする声でしたわね。ガガッとかがギツとか、お下品な……」

やはりそれが王女の本音だったのだろう。魔導書の呪いで攻撃されたことも、魔女姉妹の襲撃も、ラ・フォリアにとってはちょうどいい退屈しのぎだったのだ。とはいえ、彼女のその剛胆さによって、結果的に古城たちが救われたのも事実だった。

「これにて一件落着ですわ」

魔導書を拾い上げた銀髪の幼女が、そう言って愛らしい笑顔を古城に向けてきた。校庭では雪菜と紗矢華の暴走が続き、渦巻く霊力に魔女姉妹がまだ翻弄され続けていたが――

「……………」

まあいいか、と古城は無言で肩をすくめてみせた。

9

それから十分も経たないうちに、駆けつけてきた特区警備隊によって、魔女姉妹はあっさり拘束された。ポロボロの姿に変わった魔女姉妹には、もはや抵抗する気力も体力も残されていないかったのだ。

「どうせこんなことだろうとは思っていたが、案外あっさり片付いたものだな」

遅れて戻って来た南宮那月が、校庭の隅にへたりこんでいる古城に話しかけてくる。

「わかったのなら、もう少し早く助けに来てくれよ。おかげで酷い目に遭ったぞ」

「知るか。私は子どもが嫌いなんだ」

「ふん……」

気に入らん、と那月が眉を寄せる。どうやら魔女の姉妹にも、自分たちの脱獄を手助けしてくれた人物の心当たりはないらしい。

「まあいい、そのあたりは特区警備隊の連中に調べさせれば済むことだ。おまえもそれでいいな、ラ・フォリア・リハヴァイン」

「ええ、構いません」

幼児化したままのラ・フォリアが、優雅に微笑んでうなずいた。とつと心の折れた魔女姉妹に対する興味は、すでにラ・フォリアからは失われているのだろう。

「それよりも那月ちゃん、こいつらはいつになったら元に戻るんだ?」

幼児化したままの雪菜たちを指さして、古城が疲れた声で訊いた。

どうにか霊力の暴走は止まったものの、紗矢華は相変わらずおどおどと怯えている。雪菜も無口なままである。それでも二人は古城にびたりと寄り添って、片時も離れようとしなかった。

「魔導書の機能は停止させてある。しばらく待てば呪詛の効果が切れるはずだ。それまでせいぜい面倒を見てやるんだな」

那月はそれだけ言い残すと、拘束した魔女姉妹を連れたまま、溶けこむように虚空へと消え去った。残された古城がやれやれと息を吐く。結局、このまま呪いが解けるのを待つしかない、ということらしい。

「紗矢華たちにはずいぶん懐かれたようですね。彼女たちの幼かったころの姿が見られて、嬉しかったのではありませんか？」

幼女二人にまとりつかれている古城を見て、ラ・フォリアが愉しげに訊いてくる。

「まあ、少しはな」

古城は苦笑混じりにそう答えた。幼い紗矢華や雪菜にこんなふうに懐かれるのは、本来なら決してあり得なかったはずの出来事だ。さんざん迷惑をかけられたとはいえ、そういう意味では、あの魔女姉妹に少しくらい感謝してもいいのかもしれない、と思う。

「では古城、わたくしも抱っこしていただけますか？」

なぜか元の儀礼服に着替えたラ・フォリアが、そう言っ古城の膝の上に乗ってくる。至近距離から見上げてくる銀髪

の幼女に、古城は困惑を覚えながら、

「なんでだよ。あんたの中身は変わってないんだろ」

「よいではありませんか。こんなことができるも今だけなのですから」

ラ・フォリアは有無を言わずに両手を回して、古城の腕の中にすっぽりと収まった。それを見ていた紗矢華と雪菜が、負けじと古城の両腕にしがみついている。

「ら・ふおりあちゃんだけ、ずるい。さやかも」

「……抱っこ」

「つたく、おまえら。順番だ、順番！」

幼女三人にしがみつかれて、古城がうめいた。それを目撃

していた生徒たちの間で、古城のロリコン疑惑がものすごい勢いで膨れあがっていく。

「ところで、古城。なにか大切なことを忘れていませんか？」

満足げに古城に体重を預けたまま、ラ・フォリアが唐突に質問した。古城はハッと息を呑み、

「あ！　そうか、買い出しの途中だったんだっけか。やべえ……棚原たち、怒ってるだろうな」

「いえ。そういうことはありません。もしこのまま魔導書の呪いが消えてしまったら……」

ラ・フォリアの言葉が終わる前に、ビリッ、と突然なにかが裂けるような音がした。

「……ビリッ？」

困惑する古城の腕の中で、三人の幼女たちの肉体に変化が起きる。

手脚の長さが急激に伸びて、平坦だった体つきが柔らかな曲線を帯びた。華奢な体格はそのままだに、古城の両腕にかかる重みが増していく。魔導書に奪われていたそれぞれの「時間」が戻ったことで、本来の年齢にまでいつきに成長したのだ。

ラ・フォリアは自前の儀礼服に着替えていたし、雪菜は着ぐるみのままだった。しかし問題は紗矢華である。彼女の急激な成長に耐えきれず、安っぽい作りの子ども向けコスプレ衣装が、びりびりに破れて散らばっていく。

「う……うーん……あれ？　私、なんで……？」

なくしていた記憶を取り戻した紗矢華が、まだ少し寝ぼけ



たような表情で周囲を見回した。彼女たちの急激な変化に対応できずに、古城は紗矢華を抱きかかえたまま凍りついている。

「き、煌坂……」

「……へ？」

古城の呟きを聞きつけて、紗矢華はようやく自分が置かれている状況に気づいたらしい。破れた子供服の切れ端を貼りつけただけ、というあられもない姿で、古城に抱っこされていたのだ。硬直した紗矢華の全身が、羞恥と憤怒で赤く染まっていく。

「あ……あ、暁古城おぉおおおお！」

「ま、待て、煌坂。話を聞け……こ、これは不可抗力というか、深い事情があつて……!」

紗矢華に首を絞められながら、古城は必死に言い訳する。

そんな古城の背後から、異様な大気の震えが伝わってきた。ふと見れば半眼になった雪菜が、怒気のこもった表情で古城を見つめている。

「先輩……紗矢華さんに、いったいなにを……!」

「だから誤解だっ! ラ・フォリア、おまえからもちゃんと説明してくれ……!」

古城が、唯一の証人であるところの王女を呼んだ。しかしラ・フォリアは、古城と抱き合う半裸の紗矢華を見つめて、興味深そうに微笑んでいるだけだ。

「ふふふつ、これが日本人がよく言う既成事実というやつなのですね」

「違っ……全然違うわっ!」

絶望感に襲われながらも、必死に否定する古城。

「ん……古城君……どうしたの？」

さらに追い打ちをかけるように、気絶していた風沙が目覚めず気配がある。雪菜はなおも不機嫌な表情で古城を睨みつけ、ラ・フォリアはにこやかに目を細めているだけだ。身体を隠すために古城にしがみついたままの紗矢華が、鼓膜を破らんばかりの勢いで絶叫する。

「暁古城のばかあ——っ!」

それは彩昂祭の前日の出来事——

前夜祭は、まだ始まったばかりだった。

To Be Continued...

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第5巻初回特典付録

ストライク・ザ・ブラッド・アペンド 2

彩昂祭の昼と夜

—第一章—

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

装丁・デザイン／根津典彦 (G-SQUARE)

協力／株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス

電撃文庫編集部

© 三雲岳斗 / アスキー・メディアワークス / PROJECT STB